

## 秋冬野菜の育て方&タマネギのセット栽培

### ○秋冬野菜の栽培ポイント

#### ①適期に定植する

秋から冬にかけて気温が低下し日照時間も短くなっていくので、適期に定植しないと収穫時期が大きく遅れます。

#### ②気温が高い間に十分に生長させておく→生育がスムーズに進む

#### ③気温が高いので害虫に注意!

ヨトウムシ、バッタ、コオロギ、シンクイムシ、アオムシなどが発生しやすいので発生初期に防除します。

#### ④密植を避ける

密植すると小さな物しか収穫できなかつたり風通しが悪くて病害が発生しやすくなる  
※ハクサイなどの葉菜類は旧盆を過ぎる頃からポット苗が出回りますので、市民農園での少量の栽培ならそれを購入するのが簡単です。

### 【8月以降定植できる野菜】

種名	科	定植	収穫
ニンジン	セリ科	8/初~9/中	110-120日間
ジャガイモ	ナス科	8/下~9/初	105-130日
カブ(中カブ)	アブラナ科	8/下~9/中	10/中~12/中
レタス	キク科	8/下~9/中	40/50日
キャベツ	アブラナ科	8/下~9/下	110-120日間
シュンギク	キク科	8/下~9/下	40日~
ハクサイ	アブラナ科	9/初~9/下	60-90日間
コマツナ	アブラナ科	9/初~	35日
ミズナ	アブラナ科	9/初~	30-40日
ダイコン	アブラナ科	9/初~9/下	60日
ニンニク・ラッキョウ	ヒガンバナ科	9/初~9/下	翌年5/中~7/中
カリフラワー	アブラナ科	9/初~10/初	65-70日
ブロッコリー	アブラナ科	9/初~10/初	65-70日
ハウレンソウ	アカザ亜科	9/中~翌3/下	40日
タマネギ(極早生)	ヒガンバナ科	11/初	4/下
タマネギ(中晩生)	ヒガンバナ科	12月	6/中

## ハクサイ

地中海沿岸が原産地で、日本に伝わったのは日清戦争で中国に出征した兵士が持ち帰ったのが最初とされています。

キャベツが西洋の葉菜の代表とすれば、ハクサイは東洋の代表といえるでしょう。

キャベツよりも葉が柔らかく味もクセが無く、最近は欧米でも人気の野菜となっています。

生育適温	15～20℃前後でやや冷涼な条件を好む
品種 (播種から収穫 までの日数)	極早生:60日程度 晩生:90日程度 ※家庭菜園では極早生から中早生くらいまでの品種を選ぶと良いでしょう。
植え付け前	・苦土石灰 100g/m <sup>2</sup> をすき込んで1週間おいた後 ・堆肥 2-3kg/m <sup>2</sup> 化成肥料 100g/m <sup>2</sup> 程度 } を土にすき込み、畝立てしておきます。
播種及び 定植時期	播種:8月中旬から9月上旬 株間 40cm 程度の間隔で直まき ※ポット育苗の場合、1か月ほどして本葉が5-6枚程度の苗を定植します。 定植:9月上旬～下旬 9cm ポリポットで育苗

- ・ハクサイはある程度の枚数の葉が十分に肥大すると内側の葉が次第に立ちはじめ結球していきます。このため、生育初期に葉を十分に大きくするために肥料切れさせないように注意しながら栽培します。
- ・生育初期に、肥料切れや虫害などで葉数が少なくなると結球が遅れたり、最悪の場合には結球しないことがあります。
- ・虫除けネットを張りアオムシ、シンクイムシ等の食害を防止し、葉数と葉の大きさの確保に努める必要があります。
- ・ハクサイの根は繊細でしかも地表近くに多く張る傾向にあります。  
定植後に雨が少ない場合は数日に一度十分に水やりをして活着を促します。
- ・定植後2週間程度経てば株元に化成肥料を1-2つまみ与えて肥料切れさせないようにします。

## キャベツ

日本に伝わったのは幕末で、現在では年間を通して国内で栽培されている重要な野菜のひとつです。

栽培時期に応じて多数の品種が育成されていますが、秋から春にかけては平地での栽培適期で、特に秋作は栽培しやすい時期の栽培になります。

発芽適温	15～25℃
生育適温	20～25℃とやや冷涼な条件を好む
植え付け前	・苦土石灰 100g/m <sup>2</sup> をすき込んで1週間おいた後 ・堆肥 2-3kg/m <sup>2</sup> 化成肥料 100g/m <sup>2</sup> 程度 } を土にすき込み、畝立てしておきます。
播種時期	年内取りの場合 播種:7月中下旬 定植:8月下旬、苗を30～40cm間隔で

ハクサイと同じく、ある程度の枚数の葉(18～20枚程度)が十分に肥大すると次第に若い葉が結球態勢に入ります。このため、結球開始期までに肥料を効かせて大きくて充実した外葉を確保すると大玉が収穫できます。

※拡がり過ぎて邪魔になるからとか、通路からはみ出すからと言ってむやみに外葉を取らないために充分株間を取って定植します。

結球適温は13～25℃前後で、28℃以上や3℃以下の気温条件では結球はほとんど進行しません。

## ダイコン

定植前	・苦土石灰 100g/m <sup>2</sup> をすき込んで1週間おいた後 ・堆肥 2kg/m <sup>2</sup> 化成肥料 100g/m <sup>2</sup> 程度 } を土にすき込み、畝立てしておきます。 又根にならないよう肥料を均一のすき込む
定植	株間40cm程度
播種 収穫	9月初旬から9月末 約60日後

<重要>

アブラムシによるモザイク病が発生し易いので、徹底的にアブラムシ防除をしてください。

## ブロッコリー

極早生～晩生までの品種があり、収穫したい時期に合わせた品種を適期に種まきし、定植する必要があります。

	播種時期	定植時期	収穫開始時期
極早生	7月中旬まで	8月下旬まで	11月～
早生	7月下旬～8月中旬	9月上旬まで	11月後半～12月
中晩生	8月上中旬	9月上中旬	12月～2月

定植前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・苦土石灰 100g/m<sup>2</sup>をすき込んで1週間おいた後</li> <li>・堆肥 2-3kg/m<sup>2</sup></li> <li>化成肥料 100g/m<sup>2</sup>程度</li> </ul> を土にすき込み、畝立てしておきます。
定植	株間 40cm 程度
追肥	1回目:活着して1週間後頃 2回目:1回目の3週間後頃

食用にする部分は若い蕾です。

大きな蕾を付けるには生育初期から肥料を効かせて茎が太くなるように育てる必要があります。

### 簡単な施肥量の計り方

堆肥	スコップ1杯	約 2kg
苦土石灰	1握り	約 40g
化成肥料	1握り	約 30g
(その他)	1つまみ	約 2g

## タマネギのセット栽培

8月以降に出回る「ホームたまねぎ」を使った生食用タマネギの秋冬どり栽培について。タマネギは穀類などとともに最古の栽培植物といわれています。中央アジア原産で、世界中で栽培が多い野菜の一つです。生食、炒め物、煮物と用途が広く、いろいろな食材との相性も良いためです。日本で本格的に栽培されるようになったのは明治中期以降です。

日本でのタマネギの栽培は、関東以西では初秋まき、中秋～晩秋植付け、翌年の春～初夏収穫、北海道では春植え、晩夏～中秋に収穫、が基本で地域による違いがあります。北海道は冬季の寒さが厳しく秋植えでは株が枯死するので春植え栽培されます。北海道産は本州・九州産が端境期に差しかかる秋以降に収穫・出荷が始まりますが、球が固く煮食用で生食にはあまり向いていません。生食用は初夏に収穫され貯蔵された本州・九州産たまねぎがもっぱら利用されています。

寒さが厳しくタマネギの生育適期が短い高緯度地域では、1年目は種をまいて3cmくらいの小球(セット球と呼びます)まで育て、2年めにその小球を植え付けて大球にし、播種から収穫まで2年をかけて収穫する栽培方法があり、セット栽培と呼ばれています。

英語のセットには「若い植物」や「苗」という意味もあります。

日本でのセット球を使った秋冬どり栽培は40年ほど前にすでに技術は開発されていましたが、労力がかかる、輸入品との価格競争などの理由から普及には至りませんでした。しかし、野菜の生食志向が強まっていること、各地に農産物直売所ができて他の直売所にはない品目が求められることから、生食用品種の秋冬どり栽培が一部の産地で試みられるようになりました。

2年ほど前から、8月以降に「ホームたまねぎ」や「オニオンセット」の商品名でタマネギのセット球をホームセンターで見かけるようになりました。これを使えば栽培すると年末に新鮮な生食用タマネギを収穫することができます。

タマネギは涼しい気候が適していて、セット球を植え付ける晩夏は生育適温よりも気温がかなり高いため、栽培にはいくつかの重要なポイントがあります。

### ① 冷温処理

8月10日頃から10℃前後の冷温処理を行うと植付け後の萌芽揃いがよくなります。ビニル袋に入れて冷蔵庫で定植時まで保管すればよいでしょう。

### ② 定植準備

気温が高い時の定植であり球肥大期以降は地温が低下する時期なので、白マルチあるいはシルバーマルチを張るか、遮光資材を使って地温を下げるようにします。ビニルマルチは降雨後か、十分に灌水した後に張り、土壤水分が確保されるようにします。

施肥は、1㎡あたり苦土石灰50g、化成肥料100g、ようりんがあれば50g程度とします。過剰施肥は病害が発生しやすくなるので禁物です。

### ③ 定植日

8月30日の前後5日程度の間に植付けます。これよりも早いと葉数が少ないのに結球を始めるために小球で終わりやすくなります。

逆に、遅いと結球のための日長が短く、気温も低くなるので不結球が多くなります。

### ④ 定植

植え付け時のセット球は直径が2~2.5cmのものが最も適しています。

これよりも大きいと分球しやすくなり(後述)、小さいと球の肥大がよくありません。

数多く植える場合はセット球の直径で分けけて、大ききの似かよったものをまとめて植えると後の管理がやりやすくなります。

条間25cm、株間15cm程度で植え付けます。

植え付ける深さはセット球の首が土中に埋まる程度とします。

プランターで栽培する場合は、株間10~15cm程度で植えます。標準的なプランター1つに8~10球程度になります。

植付け後、土が乾いている場合は十分にかん水します。

### ⑤ その後の管理

植え付け後は土が乾燥しないように気をつけて、1週間で揃って芽を出させるようにします。

9~10月上旬に十分に生育させて葉の枚数(7枚程度)を確保することが植え付け後の管理の最大のポイントです。

#### <分球掻き>

植えたセット球が大きい場合、分球することがあります。

球の肥大が悪くなるので、9月下旬頃に小さい方の球を球の付け根部分から割るように裂くと簡単に取れます。残した株には軽く土寄せをしておきます

9月下旬に1㎡あたり50gの化成肥料を追肥します。追肥時期が遅れると球の肥大が遅れて結球不良となるので、遅くならないように注意します。

10月上旬に葉が6~7枚程度が確保できていると10月中旬頃から球が肥大し始めます。

順調に生育が進むと11月中旬には葉が倒れるので、倒れてから1週間後に収穫します。

※セット栽培に用いられるのは極早生の品種です。

このため、12~1月上旬までに十分に肥大しなかった株は、栽培を続けると4月には収穫できるようになります。

1~2月に葉タマネギとして収穫してすき焼きなどで食べることもできます。